

# “いじめ”への対処と大学生期の適応（Ⅱ）

－女子学生における過去の「いじめ・いじめられ体験」と適応感－

Coping to “Ijime” (Bullying) and the Adjustment in College Years

－on after-effects to adjustment feeling in female students－

弘前大学教育学部

豊嶋 秋彦<sup>(1)</sup>

青森県八戸児童相談所

順毛（石永）なお美

---

## I. 問題と方法

### I-1. 問題と目的

### I-2. 資料収集と分析の方法

## II. 「いじめ・いじめられ体験」と適応感

### II-1. 被害・加害体験強度と適応感

### II-2. 被害の時期・対処と適応感

### II-3. 加害の時期，周囲のいじめへの対応と適応感

## III. 「いじめ・いじめられ体験」への意味づけと適応感

## IV. 要約と展望

---

## I. 問題と方法

### I-1. 問題と目的

大学（学校）精神保健もそれを包括する大学（学校）教育も，生徒・学生の在学中の適応援助－指導のみが主目的なのではなく，次の生活段階・次の発達段階における適応を準備し，究極的には成人期における適応を保証するための予期的社会化の制度・機能としてのみ意味がある。この文脈では，不登校・いじめといった様々な「学校・教育の社会問題」も，それら現象のその時点における構造や背景要因の探索に焦点をあてるアプローチとともに，それら現象の当事者たちがどんな認知的・行動的対処を行い，それが次の生活（発達）段階や成人期にどんな適応を見せていくのかという対処－長期的影響（予後）に焦点をあてたアプローチも必須であろう。しかし，不登校とならんで広く進行している「いじめ」に関する後者のアプローチは，奥村ほか（1987, 1988a, b），山本・坂西（1988），坂西・山本（1989），加藤（1991）など大学保健管理に携わる研究者によるものはあっても，「学校・教育の社会問題」に専ら関わるべき教育心理学会においては小島（1990）など極く少数が見出されるに過ぎない。そこで我々は学校期における「いじめ・いじめられ」（以下，「被

---

(1)保健管理センター非常勤カウンセラー

害」・「加害」)が大学期の全体的(holistic)な適応に及ぼす長期的影響を探索する研究プロジェクトを組み、これまで“被害体験が大学期の適応や自我同一性地位を低下させる”という仮説(石永 1992)のもとに、自我同一性地位を全体的適応の指標とした分析によって、概略次のような知見をえた(石永・豊嶋 1992, 豊嶋・石永ほか 1993)。

被害体験をもつ学生の場合、強い被害感が大学までの生き方あり方の迷いを強め、小学校低学年での被害が大学期における傾注の構えを抑制するという意味で、自我同一性の達成を阻害するが、被害に対して反撃や友人への相談といった積極的対処ができることや、被害体験を事後的に「成長のきっかけになった」と意味づけできた場合、自我同一性は達成的になる。加害体験をもつ学生においては、それを加害として捉え返すことができると生き方あり方の迷いを促進し、大学期における傾注が強まり、また、小学校高学年期の加害体験が大学期の傾注の構えと自我同一性地位を押し上げる機能をもつ。他方、被害体験を持たずに加害体験だけを持つものでは、「いじめられた子はその後反省して皆と仲良くなったので、良かった」という秩序化の名を借りた正当化(森田 1985)を行うほど、自我同一性が達成的になる機制も窺われる。周囲のいじめに対する対応(役割)に関しては、「観衆」(森田 同)として関わると大学期の自我同一性は拡散的地位にまでしか達しない。

しかし学生の全体的適応にとって自我同一性は指標の一つに過ぎず、それとは別に人格適応や社会(文化)適応といった主観的・客観的適応もまた指標となる。さらに自我同一性と、主観的人格適応のトータルな指標の一つである総括的適応感(summarized feeling of total adjustment, 以下S Aと略記)とは正の関連性をもつ(芳野ほか 1989)一方で、例えば高校・大学受験期の生活空間体制など大学生にとっての過去要因が、自我同一性とS Aに対して逆方向に機能する場合もあることも知られている(豊嶋ほか 1994)。そこで本研究においては、前報と同じ弘前大学女子寮寮生からえた資料によって、大学生期のS Aや大学生活における主要生活空間領域における適応感に及ぼす影響を探索することを第一の目的としたい。なお主要な生活空間領域としては、学業、交友、家族との関係、部・サークル活動(以下、「サークル」と略)、寮活動を含む寮生活の計5領域が選ばれた。そのうち寮生活の領域とは、対象者の生活空間構造における即自的な中核領域の一つとして位置づけることができ、それ故に寮生活適応感は、S Aと並んで全体的適応の指標と見做しうるのであろう。というのは、調査時期であった学年末の在寮生とは寮生活や寮文化に感じた様々な違和感から来る退寮志向<sup>1)</sup>を抑え克服できた者であって、彼等にとっての寮とは“主我と客我の分化を迫られず、異和を生じさせない「基本的な場面”<sup>2)</sup>(安倍 1956, 150-152頁)として機能すると考えられるからである。またサークルでの適応感とは、サークル活動それ自体からえられる適応感と、<活動を媒介としたサークル集団との交流>に関する適応感との重合によって形成され、従って交友適応感の側面も併せ持つことを指摘しておく。

第二の目的は①～③の仮説の検証におかれる。前出の石永(1992)仮説は自我同一性との関連においては部分的に支持されたに留まったが、一方で奥村ほか等の先行諸研究は、大学期における心理的生理的な症状・症候・障害といった精神不健康の背景に過去の被害体験があることを示している。従ってより広く、“全体的適応感に対してネガティブな長期的影響を及ぼす”との仮説が提出可能であり、先ずこの仮説の検証が目指される(仮説①)。

次に、“被害体験を契機とした人格発達もありうる”という清水(1986, 147頁)の仮説(仮説②)の検証であり、被害体験のある者にとって、大学期の交友適応感を中心にした良好な適応は<人格

発達>の指標となるであろう。従って被害関連の諸変数のうち、大学期の適応感にポジティブな関連を持つ変数の指し示す意味を検討することによって、この仮説の間接的な検証が可能である。さらに被害体験を「成長のきっかけになった」とする意味づけとの適応感との関連性を調べることにしても、間接的な検証ができるであろう。

さらに、奥村ほか(1987)が「<くいじめられ体験>による心の傷が、その個人に大学へ入学する年になっても、稚拙な対人関係しか持てないという形で影響を及ぼし…(後略)…」(229頁)と述べ、山本・坂西(1988)が大学生期における<他者の態度への敏感さ>を、坂西・山本(1989)が大学生期における<対人的おびえと拒絶の予期不安>を抽出したことを承けて提出する、“被害体験が交友領域の非適応感をもたらす”という仮説の検証である(仮説③)。

最後に副次的目的として、本研究の分析の中で提出される新仮説(仮説④)を稿の展開過程で検証することも目指される。

## 1-2. 資料収集と分析の方法

資料の収集は、本稿の第二筆者が4年間にわたって生活拠点としてきた弘前大学女子寮において、1月末、寮内における個別的依頼・掲示によって無記名式の質問紙を配布し留め置き、対面を要しない方法で回収した。従って本調査は調査者と被調査者との間にレポートが確立しており、かつフィールドワークに近似の手法による“内側からの調査”である点に特色がある。有効回収数は122(調査実施時の月末在籍寮生の59.2%)であり、その<被害・加害体験強度>の分布状況を表1に示す。

被害体験をもつ学生の割合は、奥村ほか(1987, 1988a. b), 山本・坂西(1988)が公式調査によってえた数値の2倍~数倍に達しているが、“内側からの調査”であることによって公式調査が被りやすい防衛等によるバイアスから免れたためと思われる<sup>3)</sup>。

表1. 被害・加害体験の状況

		被害体験 n (%)	加害体験 n (%)		
あり	1. たいへんあ	83 (68.6)	73 (59.8)		
	2. かなりあ			5(4.1)	0(0)
	3. 少しあ			10(8.2)	5(4.1)
		68(55.7)	68(55.7)		
4. 全くない		38(31.1)	48(39.3)		
無答		1(0.8)	1(0.8)		

( ) 内は有効資料122名に対する%。

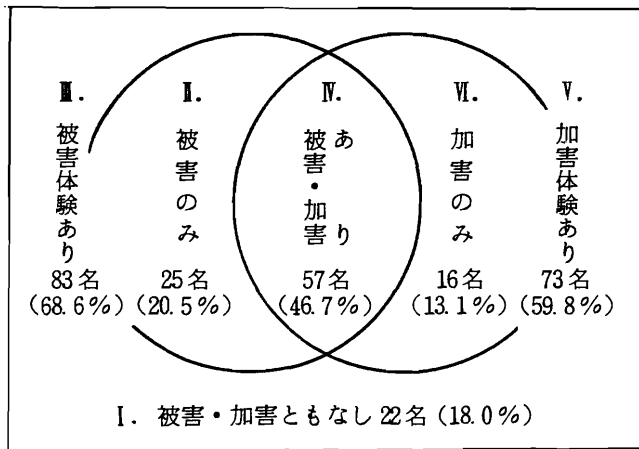
表2. 目的変数(適応感)の分布状況

尺度値	適応の領域		学業	交友	家族	部活サークル	寮生活	総括的適応感(SA)
	評語							
1	うまくいって	とても	31(25.4)	40(32.8)	14(11.5)	11(9.0)	14(11.5)	5(4.1)
2	いる	どちらかという	77(63.1)	66(54.1)	41(33.6)	82(67.2)	85(69.7)	76(62.3)
3	うまくいって	どちらかという	13(10.7)	11(9.0)	13(10.7)	24(19.7)	20(16.4)	37(30.3)
4	いない	全く	1(0.8)	3(2.5)	5(4.1)	3(7.5)	2(1.6)	4(3.3)
N A			0	2(1.6)	49(40.2)	2(1.6)	1(0.8)	0(0)
平均値(SD)			1.87(.62)	1.80(.70)	2.12(.80)	2.16(.61)	2.08(.59)	2.33(.61)

( ) 内は有効資料に対する%。

質問紙は豊嶋・石永ほか（1993）の文末資料（42-44頁）の通りであるが、SAは「学生生活は全体としてうまくいっていますか」という設問に対する「1. とてもうまくいっている」から「4. 全くうまくいっていない」までの4点尺度によって測定された。大学生生活における主要生活空間領域における領域別の主観的適応感も、SAと同様の4点尺度で捉える。SAおよび領域別適応感の状況は表2の通りである。

以下ではこれらの適応感諸変数を目的変数とし、〈被害・加害体験強度〉〈被害・加害の時期〉



〈被害への対処〉〈被害・加害への意味づけ〉〈周囲のいじめへの対応〉の諸変数を説明変数とした分析が行われるが<sup>4)</sup>、被害・加害の有無によって構成した図1の6群(I~VI; 以下「被加害6群」)別の分析も施されていく。説明変数のうち〈被害・加害体験強度〉〈被害・加害への意味づけ〉は、間隔尺度変数として設定された。〈被害への対処〉〈被害・加害への意味づけ〉〈周囲のいじめへの対応〉で用意された項目(表3)は、奥村ほか(1987, 1988a), 森田(1985), 井上ほか(1987)などに依拠した。

- ・Ⅲ.には、「被害あり」だが加害体験にはNAの者1名が含まれる。
- ・この他に、「加害なし」で被害体験にはNAの者が1名存在する。

図1. 被害・加害体験の有無による6群

表3. 〈被害への対処〉(被害・加害への意味づけ)〈周囲のいじめへの対応〉の項目リスト

被害への対処 〔多肢選択〕	我慢した、耐えた 無視した 自分だけで反撃した 家族などに相談した 友達に相談した 先生に相談した 逃げ回ったり、欠席した いじめた人と仲良くなろうとした	加害への意味づけ 〔*4点尺度〕	一種の遊びで、大して悪いこととは思わない 余りいいことではないが、社会や学校にも問題がある いじめられた方にも、多少の問題があり、仕方がない 悪いことをしたと、後悔している いじめられた子は反省して皆と仲良くなったから、良かった
被害への意味づけ 〔*4点尺度〕	自分の成長のきっかけになった くやしい・許せない 嫌な思い出で、思い出したくない 特に気にしていない 親や教師が、しつけ・教育を	周囲のいじめへの対応 〔主対応度を1肢選択〕	A. 積極的対応 とめた(仲裁) とめたいと思いつつ、見ていた(同情的傍観) B. 消極的対応 やめてほしいと思いつつ、見ていた(消極的傍観) その場から離れた(場面逃避) C. 観衆 おもしろがって見ていた

\*「1. とてもそう思う」から「4. まったくそう思わない」まで。

## II. 「いじめ・いじめられ体験」と適応感

### II-1. 被害・加害体験強度と適応感

先ず仮説①を検証する。I群（被害体験も加害体験もない者）をも含む全対象者における被・加害体験強度と適応感との相関は、表4の如く

表4. 被害・加害体験強度と適応感得点との相関係数

適応感変数	全対象者における相関				被・加害6群別の <sup>1)</sup> 被害体験強度との相関		
	被害体験		加害体験		II.被害のみ	III.被害あり	IV.被・加害あり
	n	r	n	r			
領域別適応感							
学業交友	121	.022	121	.003	-	-	-
家族	121	-.118	121	-.143	-	-.242*	-.319*
部活・サークル	119	-.054	119	-.040	-	-.232*	-.326*
寮活動・寮生活	72	.045	73	.013	-.416°	-	-
寮活動・寮生活	119	-.256**	119	-.050	-	-.386**	-.508***
総括的適応感(SA)	120	-.198*	120	-.071	-	-.241*	-.314*

一般的には弱い。しかし全体的適応の指標と見做される寮生活適応感とSAは、被害体験が強いほど不良になり、仮説①は支持された。

これを被害6群別に見ると、被害体験強度と寮生活適応感・SAの間に有意な相関係数をもつが、係数はIV(被害・加害ともにあり)群で相対的に高いのに対して、II(被害のみ)群では有意に達しない。従って仮説①から進んで、“被害体験に加害体験が重なることによって、大学期の全体的適応感は一層抑制される”と括弧ごとくできよう。

表5. 被害6群における適応感得点の比較

群	交 友			家 族			部活・サークル		
	n	$\bar{x}$	SD	n	$\bar{x}$	SD	n	$\bar{x}$	SD
I. 被・加害なし	22	1.77	.53	21	2.05	.67	15	2.40	.74
II. 被害のみ	25	1.68	.63	25	1.56	.58	20	1.90	.79
III. 被害あり	83	1.86	.63	82	1.76	.73	46	2.00	.79
IV. 被・加害あり	57	1.91	.61	56	1.84	.78	36	2.08	.80
V. 加害あり	73	1.93	.61	72	1.81	.72	37	2.11	.81
VI. 加害のみ	16	2.00	.63	16	1.69	.48	11	2.18	.87
比較(t検定)	II < V。			I > II* I > III, I > VI。			I > II, I > III。		

- ・ 群間差の認められた領域のみ表示した。
- ・  $\bar{x}$ は高得点ほど非適応的。不等号は $\bar{x}$ の高低を示す。
- ・ ° P < 0.10, \* P < 0.05。

次に仮説③（“被害体験が交友領域の非適応感をもたらす”）に関しては、全対象者については有意な相関はえられなかったが、III・IV群で被害体験が強いほど交友適応感が低下しやすい関係が認められる。II群では相関が見出せないから、“被害体験に加害体験が重なることによって大

学期の交友適応感が抑制される”のである。一方、II(被害のみ)群では交友適応感においては相関が認められないが、サークル適応感で高い負の相関が認められた。これは被害体験だけを持つ者の場合、被害体験が強いほどサークル活動や<活動を媒介としたサークル集団との交流>に関する適応感が低下することを意味する。これらから仮説③も支持をえた。

他方、被害6群の適応感得点を調べると、II群に比べV(加害あり)群の交友適応感が不良な傾向があり(表5)、“加害体験を持つ者は大学期になっても交友関係に非適応感をえやすい”と

示唆された。過去の加害の要因となっていた何かが、大学期の交友領域にもネガティブに影響し続けているとか、過去の加害を加害体験として捉え返す、いわば自責的な認知様式が大学期の交友領域にも過敏な捉え返しをさせるという解釈も可能であろう。

以上要するに、被害・加害ともに、あるいは重合して、大学期の交友適応感を低下させると結論できるが、これは新知見としてよりも仮説③の拡張と位置づけるべきであろう。というのは第一に、森田（1985）も指摘し我々の対象者においては一層そうである（図1参照）ように、被害も加害も体験する事例が相対的に多く、過去の交友領域において被害-加害の連鎖が形成されやすいと考えられるから、被害・加害のいずれか一方のみが大学期の交友適応感に影響を及ぼすと見るよりも、双方とも影響を及ぼすと見る方が自然だからである。第二の根拠は、“「いじめ」と「いじめられ」のどちらであれ、いじめに関わる中学生に枯木・下向き枝・曲がった枝など、バーンズの「無力的でとげとげしい」バウムが多い”（福島 1991, 30-31頁）という共通特徴が指摘されており、かかる共通特徴が交友領域に特にネガティブな機能を果たすと考えられるからである。こうして被害・加害ともに大学期の交友適応感を低下させ、被害・加害の双方が揃うと一層低下することになる。

これに対してサークル適応感と家族適応感では、両者ともに、被加害6群間比較（表5）において、Ⅰ（被加害なし）群の適応感が、被害あるいは加害体験があるものよりも不良であるという新知見がえられた。このうちサークル適応感は、前出のようにⅡ（被害のみ）群では被害体験が強いほど不良になるのだが、それでも、Ⅱ群を含めて被害体験を持つ者の方が全体としてⅠ群よりも良好なのである。被害体験という交友領域における外傷を、交友領域で直接回復するのではなく、間接的に・クッションを介して、＜サークル活動を媒介にした交流＞の中で回復しようという構えが生じることを通して、サークル適応感が良好になるのかも知れない。

家族適応感は被害・加害いずれであってもいじめに関わった者の方がⅠ群よりも良好である。その機制としては、いじめを契機とした家族関係の緊密化というポジティブな機制が考えられるが、逆に、次のようなネガティブな機制も関与しているかも知れない。即ち、福島が指摘したバウム特徴である枯木から示唆される劣等感・無力感・抑鬱感・罪責感、下向き枝から示唆される失敗感・喪失感・葛藤等の不適応、曲がった枝から示唆される、精神的エネルギーの流れの妨害とそれ故のスムーズな流れへの努力（高橋・高橋 1986）など、否定的感情・葛藤、それらの安定化・再適応への努力が家族へのしがみつきや準拠を強めさせ、その結果として大学期の家族適応感が主観的には良好なものに保たれる、という機制である。

この節では先ず仮説①・③が確かめられ、次に、被害体験に加害体験が重なることによって大学期の全体的適応感と交友適応感が一層抑制され、加害体験を持つ者は大学期になっても交友関係に非適応感をえやすく、被害あるいは加害体験をもつ者のサークル適応感と家族適応感が、被加害なし群よりも良好になるなどの関係が見出され、かかる関係が作られる機制が次のように考察された。即ち、劣等感・無力感など生活空間構造内の交友領域での障害が被害・加害体験と大学期の不良な適応をもたらし、その補償あるいは回復の水路として、第一に＜集団の活動を媒介にできることによってクッションをおける間接的交流の場＞たるサークルによる自我支持を求め、第二に、家族へのしがみつきや準拠をもたらすという機制や、大学期になっても過去の加害体験を自責的に認知させる対人的過敏さが交友領域での非適応感をもたらすという機制である。なお、仮説②を支持す

るデータは見出されなかった。

## II-2. 被害の時期・対処と適応感

ここではⅢ（被害あり）群を対象として、＜被害の時期＞および＜被害への対処＞（いずれも、該当の選択肢全てを無制限選択）と大学期の適応感との関係が、当該項目の選択者而非選択者の適応感得点の比較によって探索される。＜被害の時期＞に関しては補助的に「被害なし」者（Ⅰ群+Ⅵ群；表中c群）との差も調べられた。差が見出された項目・領域について、結果を表6に一括する。なお＜被害の時期＞の選択肢としては小学校低学年・高学年・中学校・高校・浪人期の5時期を設定したが、浪人期に被害体験をもつ者は皆無であった。＜被害への対処＞の選択肢は8つ（表3参照）である。

表6. 〈被害の時期〉〈被害への対処〉と適応感

選 択 肢	領 域	Ⅲ（被害あり）群						平均値比較 方向, t 値	c. 被害なし者 (Ⅰ+Ⅵ群)	比 較				
		a. 選 択 者			b. 非 選 択 者					a : c	b : c			
		n	$\bar{x}$	SD	n	$\bar{x}$	SD							
被 害 の 時 期	小 低 学 学 校 校 年	家 寮 S 生 活 A	19	2.16	.90	63	1.63	.63	> 2.37*	37	1.89	.61	>*	-
			19	2.42	.61	62	2.10	.67	> 1.88°	38	2.11	.45	>*	-
			19	2.37	.68	64	2.03	.59	> 2.11*	37	2.00	.47	>*	-
	小 高 学 学 校 校 年	交 友 S ( サ ー ク ル )	37	1.65	.54	46	2.02	.65	< 2.80**	38	1.87	.58	<°	-
			(22)	1.86	.56)	(44)	2.27	.72)	-	(26)	2.31	.78)	<*	-
		37	1.95	.52	46	2.24	.67	< 2.19*	37	2.00	.47	-	<°	
	中 学 校	(家 族 サ ー ク ル)	(34)	1.62	.69)	(48)	1.85	.74)	-	(37)	1.89	.61)	<°	-
			(19)	2.11	.94)	(27)	1.93	.68)	-	(26)	2.31	.79)	-	<°
	高 校	交 友 S サ ー ク ル 生 活 A	5	2.40	.55	78	1.82	.62	> 2.04*	38	1.87	.58	>°	-
			3	3.67	.58	43	1.88	.66	> 4.53***	26	2.31	.79	>**	<*
			4	2.75	.50	77	2.14	.66	> 1.80°	38	2.11	.45	>*	-
			5	2.60	.55	78	2.08	.62	> 1.84°	37	2.00	.47	>*	-
対 処	我慢した	交 友	61	1.93	.63	22	1.64	.58	> 1.94°	・差の認められた領域のみ表示。 ( ) は a-b 差なし。 ・ $\bar{x}$ は高得点ほど非適応的。 不等号は高低を示す。				
	友人に相談	交 友	12	1.50	.67	71	1.92	.60	< 2.17*					
		サ ー ク ル	8	1.50	.53	38	2.10	.80	< 2.04*					
逃げた	寮 生活	5	2.00	.00	76	2.18	.69	< 2.34*						

° P<0.10, \* P<0.05, \*\* P<0.01, \*\*\* P<0.001。

(1) 被害の時期 特定時期の特定領域に限定的な知見の羅列を避け、比較的広範に現れている特徴や時期ごと・領域ごとの特徴をまとめると、次の諸項がえられる。但し第7項は限定的知見である。

1) 一部を除いて群間差は次のようなパターンを示す。選択者（その時期に被害があった者）と非選択者（その時期には被害がなく他の時期に被害があった者）との間で差が認められると、選択者と「被害なし」者との間でも同方向の差が見出され、その一方で、非選択者とc群の間では差がない、というパターンである。即ちその時期に被害体験があると、他の時期における被害の有無とは無関係に大学期の適応感が規定されることが多いのである。勿論、前節で見たように被害時期とは

無関係の〈一般的な〉被害強度・被害の有無が大学期の適応感に影響するのではあるが、それと同時に、被害時期が大学期の適応感に対して特異的な、他の時期の被害よりもその時期の被害こそが影響力をもつという意味で〈不可逆的な〉、影響を及ぼすことが多いと示唆された。

2) 中学校期の被害体験が大学期の適応感に及ぼす影響は全般に弱い。これは、中学校期の被害体験・加害体験がどちらも、自我同一性との関係が弱かった事実(豊嶋・石永ほか 1993, 30-31頁)とも符号する。なお家族適応感では中学校期の選択者がc群に比べて良好であるが、非選択者との間では差がないので、中学校期の被害の強い特徴とは言い難い。サークル適応感において非選択者とc群との間で見出された差とともに、前節で指摘された“被害または加害体験がある者のサークル適応感と家族適応感がI群よりも良好になる”関係が、中学校期の被害において特に明らかであることを示すデータと見るべきであろう。

3) 高校期と小学校期の被害体験は、全体的適応感(寮生活適応感およびSA)に関係している。但し小学校低学年期と高校期の被害体験は大学期の全体的適応感を低下させるのに対して、小学校高学年の被害は逆に全体的適応感を向上させると見られる。

これらのうち、まず高校期の被害体験による低下は二つの理由・機制が関与していよう。第一は、それが直近の体験であるために外傷として残りやすいことである。第二は、我々の対象者の殆どが〈進学校〉かまたは〈進学クラス〉出身であることを考えると、森田(1985)が指摘した大学進学志望者の価値的雰囲気(文化)の中での被害体験が、多数派からの疎外感をうみ、外傷を強め深めるといふ機制である。ここで〈進学校〉の価値的雰囲気とは、“受験戦争のルールを踏み外すまいといじめに距離をおき、傍観者に留まりがちな安定志向の〈良い子〉集団”(森田 1985, 33頁)が形成するであろう文化であって、そこでは「いじめ」は極く少数となり、被害者を支え援助するような友人関係もえにくくなると考えられる。事実、我々の対象者において高校期に被害体験を持つ者は6名、加害体験を持つ者は1名に留まっている。

次に、小学校低学年期の被害による全体的適応感の低下は、より基底的な次の二つの適応障害に関係しているかも知れない。第一は、学校生活や同年令集団との関わりの基底が確立されるべき時期に、大学期になってもなお「被害」として認知され続けるほどの被害を体験してしまったことによる基底的な学校(あるいは集団生活)適応障害である。第二の適応障害とは、前述のように被害体験は一般に家族適応感にはポジティブに機能するにもかかわらず、この時期の被害体験はそれにネガティブに機能するという逆転から示唆されるものである。即ち、小学校低学年期の前後、あるいはそれ以前に存在した家族との間の基底的適応障害がこの時期の被害体験とネガティブに相互作用しあい、その結果、大学期の家族適応感も全体的適応感も抑制されるという機制が関与しているかも知れない。

なお小学校高学年期の被害と全体的適応感との関係は、次項で考察される。

4) 小学校高学年期の被害は、他の時期とは逆に、大学期の適応感に対してポジティブな影響を及ぼしている。選択者と非選択者の間には差が認めがたいサークル適応感においても、選択者とc群の間に同方向の差があること、さらに、SAにおいては非選択者(他の時期に被害あり)と比べてもc群が不良な適応感を示すことは、高学年での被害が大学期の適応感に及ぼすポジティブな影響を一層鮮明にする。要するに大学期の適応に対する機能から見ると、小学校高学年における被害体験の意味は他の時期とは異質であると言えよう。ここから二つの解釈が導きうる。



第一の解釈は、“この時期になると、被害体験を契機にして、交友関係のとり方・学校生活の送り方について試行錯誤や模索ができるようになり、結果的に却ってその後の交友適応や集団的活動での適応、ひいては全体的適応感などが改善していく”という解釈である。この場合、仮説②（“被害体験を契機とした人格発達もありうる”）は間接的な支持をえたことになる。但しその場合でも、他の時期、特に小学校低学年期と高校期の被害体験は大学期の適応感を低下させやすいから、仮説②には“小学校低学年期（被害体験が基底的な適応障害に関係しやすい時期）を過ぎてからの被害であり、かつ直近の被害でもないこと”という限定を付す必要がある。

他方、この時期の加害体験は他の時期のそれとは逆に、大学期の自我同一性に対してもやはりポジティブな影響を与え、さらに、この時期の被害体験は自我同一性にネガティブな影響は与えないことが示されている（豊嶋・石永ほか 1993, 31-32頁）。これに注目すると第二の解釈も導出できよう。即ち被害にせよ加害にせよこの時期の「いじめ」は、ダイナミックな交友関係の中で生じやすく、そのダイナミズムに入っていけるほどの活動性や積極性が、その時期における被害や加害をもたらすとともに、後続の交友～集団的活動領域における良好な適応感や良好な全体的適応感を準備していく、という解釈である。

5) 3, 4項での指摘をまとめると、次の仮説を提出できよう。“被害も加害も小学校低学年と高校期における体験が、大学期の全体的適応感と自我同一性との双方に対してネガティブな影響を与えるのに対して、小学校高学年での体験がポジティブに影響し、その一方で中学校期における体験の影響力は弱い”という仮説（仮説④）である。なおこの仮説の中の加害体験と全体的適応感との関係については、Ⅱ-3節で検証される。

6) 大学期の学業適応感は、どの時期の被害体験とも関係が弱い。表4の通り、全対象者においても被害加害6群別に見ても、被害体験強度と学業適応感との相関が見出せなかったことと併せると、大学期の学業は過去の被害体験とは相対的に独立した生活空間領域を構成していると言えよう。

7) 高校期の被害体験と大学期のサークル適応感の関係はし字型を呈する。この時期に被害体験があるとサークル適応感は極く不良となり、他の時期の被害体験が良好なサークル適応感をもたらす、被害体験が全くないとやや不良になるという関係である。高校期の被害体験が直近の体験であるために不良になる機制と、前章で述べた、“交友領域における外傷を、間接的に・クッションをおいて、＜集団的活動を媒介にした交流＞の中で回復しよう”という補償の構えとが重なって、かかる関係がもたらされたと解される。

**(2) 被害への対処** 8つの対処夫々の選択の有無と大学期の適応との関係が探索され（表6）、「我慢した、耐えた」という対処が大学期の交友適応感を不良にし、「友達に相談した」との対処が交友とサークル適応感を良好にし、「逃げ回ったり、欠席した」が寮生活適応感を良好にすると示唆された。また8つの対処について選択に1点、非選択に0点を割り当てて実施した数量化Ⅲ類によってえられた主要5軸のカテゴリー係数（表7）との相関係数も調べられたが、軸2（「友人への相談」）においてのみ関連が認められた。交友適応感との間で  $-0.318$  ( $p < 0.05$ )、サークル適応感との間で  $-0.249$  ( $p < 0.10$ ) である。これをⅡ（被害のみ）群に限って見ると、交友適応感と軸2の相関係数は  $-0.434$  ( $p < 0.05$ ) になる。

これらのうち、友人への相談がポジティブに機能することは、周囲の人への相談が被害の軽減や

表7. (被害への対処)に対する数量化Ⅲ類の軸とカテゴリー係数

被害への対処	軸1： いじめ場 からの離脱	軸2： 友人への相談	軸3： 加害者への アサーション	軸4： アサーション の直接性 vs. 間接性	軸5： 教師への相談 vs. ひとり で対処
1)我慢・耐えた	.148	-.237	-.291	.028	-.016
2)無視	.221	-.111	-.237	.294	.009
3)自分だけで反撃	.039	.166	<b>.758</b>	<b>.385</b>	<b>-.345</b>
4)家族に相談	<b>-.556</b>	-.020	.243	-.103	.145
5)友達に相談	.073	<b>.916</b>	-.159	-.257	.028
6)先生に相談	<b>-.327</b>	.044	.085	.220	<b>.785</b>
7)逃げ回り・欠席	<b>-.693</b>	-.041	-.267	-.108	<b>-.484</b>
8)仲良くなろうとした	.159	-.245	<b>.350</b>	<b>-.793</b>	.091
固有値	.429	.382	.324	.298	.234
寄与率(%)	22.6	20.1	17.0	15.7	12.3

・軸6以下は寄与率が7%以下であるので軸5までで打ち切った。

「いじめ」の解消をもたらすとした山本・坂西(1988)に符合している。しかしそれが大学期の交友・サークル領域の適応感を良好にする現象を説明するためには、山本・坂西の言う“直接の解決効果”だけではなく、友人に相談できるだけの交友スキル・レディネスが既にその時点であったことや、友人による自我支持の体験によって、後続の交友や<集団活動を媒介とした交流>が支えられていく機制も想定すべきであろう。しかしいずれにせよ、被害体験を契機にした友人との交流が後続の交友・交流適応感を支えていくと解され、そのような対処がとれた被害者には、“いじめをきっかけとした発達”がえられやすいと言え、その意味で仮説②は部分的に支持された。

「我慢した、耐えた」という、いわば消極的・非(没)対人的な孤独な対処が交友適応感を抑制するのは、被害時点における交友からの自我支持の不十分さや、友人に助けを求めるスキル・レディネスの不十分さが、大学期になっても対人交流の困難として尾をひくためかも知れない。

「逃げ回ったり、欠席した」が寮生活適応感を良好にする機制は不詳である。事実として指摘するに留める。

以上本節では、先ず<被害の時期>の分析において、小学校高学年に限定すれば仮説②(“被害体験を契機とした人格発達もありうる”)が支持された。次に、被害の時期が、他の時期における被害の有無にかかわらず、大学期の適応感に特異的・<不可逆的>な影響を及ぼすことが多いこと、小学校低学年と高校期の被害体験が大学期の全体的適応感にネガティブに機能し、小学校高学年の被害体験が交友適応感と全体的適応感にポジティブに機能すること、中学校期の被害体験は大学期の適応感との関係が弱いことが見出され、それらの機制・要因が考察され、特に小学校低学年での被害については、学校生活(集団生活)および/または家族関係の、より基底的な適応障害に関係するとの解釈を提出した。さらに、自我同一性に関する前報の知見とも総合して、被害・加害の時期と全体的適応の関係について表8のような新仮説(仮説④)が提出された。そのうち小学校高学年での被害・加害が果たすポジティブな機能については、“この時期のダイナミックな交友関係に入っていけることが、この時期の被害と加害を体験させやすくするが、それと同時に後続の交友～集団的活動領域での適応や全体的適応のレディネスとなる”という説明仮説が提出された。最後に、<被害への対処>の分析からは、友人への相談が大学期の交友やサークル領域における適応感を支

えるのに対して、「我慢・耐える」といった消極的で孤独な対処が交友適応感を抑制することが知られ、その機制が考察された。また友人への相談ができた者の場合、被害体験と相談とが契機になって後続の発達を支えられるという意味では、仮説②は部分的に支持された。

### Ⅱ-3. 加害の時期、周囲のいじめへの対応と適応感

(1) 加害の時期 表9にV(加害あり)群の間での比較結果と、「加害なし」者(I群+II群;表9の「c」群)との比較結果を一括した。以下、探索的アプローチの後に仮説④が検証される。

表8. 被加害の時期と大学期の適応との関係についての仮説的モデル

自我同一性	被加害の時期	全体的適応感
-	小学校低学年	-
+	小学校高学年	+
0	中学校	0
-	高校	-

-…被害体験があるほど低下  
+…被害体験があるほど向上  
0…被害体験との関係が弱い

表9. (加害の時期)と適応感

選択肢	領域	V(加害あり)群						平均値比較方向, t値	c.加害なし者(I+II群)	比較			
		a.選択者			b.非選択者					a:c	b:c		
		n	$\bar{x}$	SD	n	$\bar{x}$	SD						
小学校低学年	(交友サークル)	(13 6	2.08 2.83	.64 1.17	(60 31	1.90 1.97	.60 .66	- > 2.58*	(47 35	1.72 2.11	.58 .80	>. >.	- -
小学校高学年	(交友家族(SA))	(37 36 (37	1.89 1.61 2.00	.57 .69 .53	(36 36 (36	1.97 2.00 2.22	.65 .72 .64	- < 2.35* -	(47 46 46	1.72 1.78 1.98	.58 .66 .49	- - -	>. - >.
中学校	(交友)	(31	2.00	.58)	(42	1.88	.63)	-	(47	1.72	.58)	>*	-

- ・差の認められた領域のみ表示。( )はa-b差なし。
- ・ $\bar{x}$ は高得点ほど非適応的。不等号は高低を示す。
- ・ $\circ$  P<0.10, \* P<0.05。

選択者と非選択者の間で差が認められたのは、小学校低学年期の加害体験とサークル適応感、小学校高学年期の加害体験と家族適応感の二者のみであり、加害体験時期と大学期の適応感との関係は全般に弱い。しかし選択者とc群の比較にも注意すると、小学校低学年と中学校における加害が交友適応感を不良にする傾向が見出される。これらから次の小括と考察が導かれる。

1) 小学校低学年と中学期の加害体験が大学期の交友や<集団的活動を媒介にした交流>領域における適応感を低下させる。Ⅱ-1節で見出した“加害体験を持つ者は大学期になっても交友関係に非適応感をえやすい”という関係は、特に小学校低学年と中学期の加害体験についてあてはまるのである。“過去の加害の要因となっていた何かが、大学期の交友領域にもネガティブに影響し続ける”とか“過去の行為を加害体験として自責的に認知する対人的過敏さが交友領域での非適応感をもたらす”(Ⅱ-1節)という解釈が可能であろう。

2) 小学校高学年の加害体験が大学期の家族適応感を良好にすると示唆されるが、これはⅡ-1節で述べた、“加害体験を持つ者における良好な家族適応感”は特に小学校高学年における加害で明かであると言えよう。その機制としては“「いじめ」を契機にした家族関係の緊密化”や“「いじ

め」に向かわせるような劣等感・無力感による家族へのしがみつきや準拠”（Ⅱ－1節）などが考えられる。

3) 小学校高学年での加害体験は他の時期の加害体験とは逆に、大学期の適応感にポジティブな機能をもち、これは次に論じられる仮説④の下位命題の検証にもなる。

4) 仮説④を検証すると、まず高校期の加害については、この時期に加害体験を持つ者が1名に過ぎないから保留され、次に、高校期以外の時期での加害体験についても、寮生活適応感とSAともに選択者と非選択者の間に差がない（ $p > 0.10$ ）。こうして仮説④は棄却できるかに見える。

しかし、小学校高学年での非選択者、即ちこの時期以外で加害体験を持つ群（高校での加害体験ありは1名なので、実質的には小低学年と中学期に加害体験を持つ者から構成される）は、c群よりもSAが不良である（表8の「b : c」列）。また小学校高学年での選択者のSA得点（2.00）と非選択者の得点（2.22）の差は、有意水準が10.9%（ $t = 1.58$ ）に達している。このような根拠によって、仮説④を構成する“小学校高学年での加害体験が大学期の全体的適応感を良好にする”という命題は、支持される。さらに、小学校低学年または中学期の加害体験が全体的適応感を不良にしていること、および、中学期の全体的適応感には差が見出されなかったことによって、仮説④を構成する“小学校低学年での加害体験は全体的適応感を不良にする”“中学期の加害体験は全体的適応感との関係が弱い”という二つの命題も消極的な証拠をえた。加えて、中学期については選択者と非選択者の間で差が認められた領域が皆無であることも、“中学期の加害体験は関係が弱い”という命題を間接的に支持している。というのはこの調査で設定した生活空間領域別の適応感は、理論的に見ても、我々の一連の大学生研究の多くの資料によっても、一般に全体的適応感との間でポジティブな関連をもつと見做しうるからである。ちなみに対象者における領域別適応感とSAとの相関係数は、学業適応感との間で.410、交友適応感で.536、家族適応感で.361、サークル適応感で.173、寮生活適応感で.409であり、寮生活適応感との相関係数は、学業適応感との間で.263、交友適応感で.431、家族適応感で.385、サークル適応感で.092であった（サークル適応感が $n = 72 \sim 73$ , n. s.。他は $n = 118 \sim 121$ ,  $p < 0.001$ ）。これらから、仮説④は高校期を除き、支持された。

(2) 周囲のいじめへの対応 時期別（小・中・高の3時期）に表3の5つの対応型から主対応

表10. (周囲のいじめへの対応)と適応感

時期	領域	A. 積極的対応			B. 消極的対応			C. 観衆			比較(t検定)
		n	$\bar{x}$	SD	n	$\bar{x}$	SD	n	$\bar{x}$	SD	
小学校	卒業	49	2.31	.65	29	2.28	.53	7	2.71	.76	$\text{II} < \text{III}^\circ$
	交友	49	1.88	.73	29	1.83	.54	7	2.29	.49	$\text{II} < \text{III}^*$
	サークル	32	2.13	.83	18	2.00	.69	2	3.00	1.41	$\text{II} < \text{III}^\circ$
中学校	寮生活	32	1.66	.55	44	1.89	.58	3	2.33	.58	$\text{I} < \text{II}^\circ, \text{I} < \text{III}^*$
	交友生活	31	2.00	.63	44	2.18	.50	3	2.00	.00	$\text{II} > \text{III}^*$
高校	学業	10	2.60	.52	16	2.38	.62	2	2.00	.00	$\text{I} > \text{III}^{**}, \text{II} > \text{III}^*$
	交友	10	2.30	.67	16	1.81	.54	2	1.50	.71	$\text{I} > \text{II}^\circ$
	家族	10	2.40	.84	16	1.88	.50	2	1.50	.71	$\text{I} > \text{II}^\circ$
	寮生活	10	2.80	.63	16	2.25	.45	2	2.00	.14	$\text{I} > \text{II}^*$

°  $P < 0.10$ , \*  $P < 0.05$ , \*\*  $P < 0.01$ .

を一枝選択させたが、複数選択者も多かったために「積極的対応」「消極的対応」「観衆」の3型に反応を大別<sup>5)</sup>し統計処理を行った（表10）。比較的広範に現れている特徴や、時期ごと

・領域ごとの特徴をまとめる。

- 1) 周囲のいじめへの対応の仕方は、時期が違くと大学期の適応感に異なる方向の影響を及ぼすと見られることが興味深い。小学校～中学期、ことに小学校期の対応は、観衆的対応（おもしろがる・はやすなど）ほど大学期の適応感が不良になり、積極的対応（仲裁および同情的傍観）をとるほど良好になるのに、中学～高校期、ことに高校期では、観衆や消極的対応ほど大学期の適応感が良好に、積極的対応（消極的傍観および場面逃避）ほど不良になるという逆転がそれである。このうち、小学校～中学期の結果は、この時期に対人的積極性や援助の規範・スキルを獲得しているほど、学業領域を含む生活諸領域にその後も積極的に関わり、支えられていきやすいことを示唆するものである。それに対して中学～高校期の結果は、やや解釈が困難である。＜傍観的な“良い子”＞を主流派とする高校の生徒文化の中で、積極的対応が却って疎外感をもたらして後続の適応感が広く阻害されるのかも知れない。あるいは、拡散的同一性（D-M 中間）地位者が圧倒的多数派を形成する大学社会－寮集団（豊嶋・石永 1993）において、“私生活の安息を妨げぬ限りで、数人の小グループに依存するが、自分を傷つけぬために現実へのコミットメントを回避し、他者との深い関わりを欠く「繭の中のカイコ」状況”（石井 1981）という学生文化の中で、主観的に良好な適応感を良好に保つためには、中・高期から既に他者援助を避け浅く軽い対人交流様式を身につけておいた方がよい、ということかも知れない。
- 2) 周囲のいじめに対するどの時期の対応も、方向性の違いはあれ大学期の交友適応感に影響を及ぼすと示唆された。全ての時期について関連性を持つ領域は他にはなく、小学校ではサークル適応感との関連も見出されているから、周囲のいじめに対して援助的な関わりがとれるか否かや、援助的感情・対決への構えが喚起されるか否かが、大学期の交友・対人交流に広く影響すると言えよう。但し、中学期までの対応が持つ影響と高校期のそれとに方向性の逆転があることは、前項で指摘した通りである。
- 3) 寮生活適応感に対しては、中学期以降の積極的対応がむしろネガティブな関連を持つ。中・高期という比較的近い時期に“援助的な関わり・感情、他者への対決の構え”を現していたということは、大学期になってもかかる構えを出しやすくと示唆され、それが寮という共同生活の場では却って疎まれたり空転することによって、寮生活適応感が低下するのかも知れない。

以上本節では、先ずく加害の時期>に関して仮説④が概ね支持されたほか、＜周囲のいじめ>に積極的・援助的な行動や構えではなく観衆として関わったり、小学校低学年と中学期に加害体験があると、大学期の適応感に交友や＜集団活動を媒介とした交流＞の領域を中心に低下しやすいこと、しかしそれとは逆に、小学校高学年の加害や、高校期の＜周囲のいじめ>に対する消極的あるいは観衆的関わりは、比較的多くの領域で大学期の適応感を良好にすること、中・高期の＜周囲のいじめ>に対する積極的対応が大学期の寮生活適応感を悪化させることなどが示された。これらのうち高校期の＜周囲のいじめ>に対する積極的・援助的対応が大学期の適応感に対して持つネガティブな影響は、大学進学志望者集団における傍観者的な価値的雰囲気と、浅い交流・拡散的な適応によって特徴づけられる学生文化との関連で考察されたが、要するに、加害も＜周囲のいじめ>への対応も、その時期によって大学期の適応感に対して与える影響の方向が異なることが重要な知見と言えよう。

### Ⅲ. 「いじめ・いじめられ体験」への意味づけと適応感

Ⅲ（被害あり）群における「過去の被害への意味づけ」得点，および，Ⅴ（加害あり）群における「過去の加害への意味づけ」得点と適応感得点との相関係数によって，意味づけとの関係を鳥瞰

表11. <被害・加害への意味づけ> 適応感の相関関係  
-被害あり(Ⅲ)群と加害あり(Ⅴ)群について-

現在の意味づけ		領域					S A
		学業	交友	家族	サークル	寮生活	
Ⅲ被害あり群	対被害 成長のきっかけが くやしい・許せない 思い出したくない 気持ちにしている しつけ・教育を		-.266* -.381** .278*	-.216°			-.251* -.317**
Ⅴ加害あり群	対加害 一種の遊び 社会・学校にも問題 被害者にも問題 後悔している かえって良かった	-.257*	-.196° .210° -.199°		.293°		-.266*

・+はその項目への同意が強いほど適応感が良好になる。-は逆。  
・空欄 P>0.10, ° P<0.10, \* P<0.05, \*\* P<0.01。

表12. <被害・加害への意味づけ> 適応感の相関関係  
-被害のみ(Ⅱ)群, 被害あり(Ⅳ)群, 加害のみ(Ⅵ)群について-

群	現在の意味づけ(軸)		領域					S A
			学業	交友	家族	サークル	寮生活	
Ⅱ被害のみ群	対被害 成長のきっかけが くやしい・許せない 思い出したくない 気持ちにしている しつけ・教育を		.427* .443* -.529** .348°	.379° -.406*	.384°		.438*	.526**
Ⅳ被害あり群	対被害 成長のきっかけが くやしい・許せない 思い出したくない 気持ちにしている しつけ・教育を		-.347** -.444** .335*	-.232° -.347** .232°			-.311* -.375** .299*	
	対加害 一種の遊び 社会・学校にも問題 被害者にも問題 後悔している かえって良かった	-.233°	-.259° .243° -.327*				-.262°	-.233°
Ⅵ加害のみ群	対加害 一種の遊び 社会・学校にも問題 被害者にも問題 後悔している かえって良かった	.622*			.559°		.554*	

・+はその項目への同意が強いほど適応感得点が良好になる。-は逆。  
・空欄 P>0.10, ° P<0.10, \* P<0.05, \*\* P<0.01。

する(表11)。しかし前報で見たように、例えばⅢ(被害あり)群の中でもⅡ(被害のみ)群とⅣ(被害あり)群とは異なる結果がえられる可能性がある。そこで、次に他の群(Ⅱ; 被害のみ, Ⅳ; 被害あり, Ⅵ; 加害のみ)で同様の分析が行われた。Ⅲ群による知見が1~4項に、次に、5項以下ではⅡ, Ⅳ, Ⅵ群の分析結果(表12)がまとめられる。

1) 被害・加害いずれへの意味づけもSAとの関連が弱いが、寮生活適応感との関連が認められるという意味で全体的適応感と関係しており、交友適応感とも関連をもつ。

2) 被害への意味づけでは、「くやしい・許せない」「思い出したくない」という外傷的なこだわりが強いほど、交友および生活の場(寮と家

族)での適応感が低下し、「気にしていない」という“こだわりからの解放”が進んでいるほど交友適応感が良好になる。一次的に、被害体験へのこだわりの有無が鍵であることがわかる。

3) 前述の“こだわりからの解放”が大学期の適応感を良好にするとの知見は、解放ができた場合については、仮説②(“被害体験を契機とした人格発達もありうる”)が支持されることを意味するが、解放とは発達の契機とも発達の所産とも決めがたい。従って、仮説②はここでは保留されたと見るべきであろう。しかも「成長のきっかけ」と適応感との関係は全般に弱い。そう認知できようができまいが<人格発達>とのリニアな関連はないのである。Ⅲ群の「被害への意味づけ」の分析の限りでは、総じて、仮説②は明確な支持を欠く。

4) 加害への意味づけではやや複雑な関係が見出された。「後悔している」の結果から、加害が外傷体験として残るほど交友適応感と全体的適応感が低下することが知られるが、それに対して「社会・学校にも問題がある」「被害者にも問題がある」といった責任転嫁・合理化の構えが強いほど、学業適応感は低下するものの、交友や<集団活動を媒介とした交流>における適応感は良好になるのである。大学期の交友・交流適応感が、浅いレベルの、自己直面や対決を欠くものに留まりがちなのが示唆される。とはいえ「社会・学校にも問題」は交友適応感を低下させもしているので、“責任転嫁・合理化”がこの領域に果たす機能は両向的とも言えよう。

5) ここではⅡ(被害のみ)群からの知見がまとめられる。

①被害体験を「成長のきっかけ」と意味づけできているほど、交友・家族・寮生活適応感とSAとが良好になる。さらに「思いたしたくない」と認知するほど、交友適応感が低下する。また、既にⅡ-2節の(2)で触れたことであるが、Ⅱ群において、交友適応感と数量化Ⅲ類による軸2(「友人への相談」との間には $-0.434$  ( $p < 0.05$ )の相関係数えられ、友人への相談が後続の適応感を支えることもわかる。被害体験に直面する構えが強く、友人に相談でき、成長の契機となしえた者においては、大学期の交友や生活の場(家族、寮)における適応感と全体的適応感が良好になり、その意味で仮説②は支持されたと見えよう。しかし逆に言えば、被害体験への直面や友人からの支えに欠け、成長のきっかけと認知するのに失敗した場合、大学期の適応感は抑制されるから、仮説②は<被害体験への適切な対処>という媒介があって始めて成立する仮説に過ぎぬと見做すべきである。実はこれまでの仮説②に関する検討では、“友人への相談を媒介にした発達”と“小学校高学年期のダイナミックな友人関係に入れる中での被害体験による発達”とがありうると考察されたに留まっている。いずれも媒介項や前提条件が付される。仮説②を無媒介に提示することは、加害者や、いじめに有効な対処ができない教師の合理化と遁辞を利する危険があると主張したい。

②学業適応感は「くやしい・許せない」「思いたしたくない」「(親や教師がもっと)しつけ・教育を」とするほど良好に、「気にしていない」とするほど不良になる。外傷的なこだわりが強いほど、権威依存あるいは知性化によってこだわりを処理する構えが強いほど、学業に傾注したり学業から自我支持をえようとする示唆され、外傷によって低下した自尊を回復する通路として学業が機能しているのかも知れない。ちなみに学業は前章まででは「いじめ」との関連が弱い領域であったし、この章でも他の群では<意味づけ>との関連は弱いにもかかわらず、Ⅱ群においてのみかかる関係が見出されることは興味深い。大学期の学業適応感の特殊性が示唆されたと見えよう。

6) Ⅳ(被害・加害ともにあり)群での結果はⅢ・Ⅴ群とほぼ同様であり、被害・加害への意味づけと大学期の適応感との関連性はⅢ~Ⅴ群で共通すると言える。但し、「社会・学校にも問題」と

いう認知が強いほどS Aが不良になるのはこの群でのみ明かな関係であり、逆に、V群では認められた「社会・学校にも問題」とするほどサークル適応感が良好になる関係は、この群では見出しえない。従ってこの群においては、過去の加害の“責任転嫁・合理化の構え”が大学期の適応感を良好にする程度は、V群よりも小さいと言える。

7) VI（加害のみ）群では、「一種の遊び」「被害者にも問題がある」といった“責任転嫁・合理化の構え”が強いほどサークル・寮生活適応感を良好にし、「後悔している」が学業適応感を良好にする関係が認められた。過去の加害体験へのこだわり・自責感が、＜集団的活動を媒介とした交流＞や集団生活における適応感を抑制する一方で、補償的に学業に向かわせることが窺われる。

以上、本章の探索的アプローチからは、被害体験に対する外傷的なこだわりの強さが不良な交友適応感に結び付くこと、加害体験を持たない被害体験のみの者では、被害体験に直面でき友人への相談や成長の契機としての捉え返しを媒介に、交友適応感と全体的適応感が良好になること、良好な学業適応感は、一方では被害体験へのこだわり・知性化による防衛、他方では、加害体験へのこだわり・自責感からもたらされやすいこと、加害体験を“責任転嫁・合理化”する構えが交友・＜集団的活動を媒介とした交流＞での適応感や全体的適応感を良好にすることなどが示唆された。次に仮説②（“被害体験を契機とした人格発達もありうる”）については、被害への直面と友人への相談といった＜適切な対処＞がとられ、成長感が事後的にえられる限りにおいて大学期の高い適応がもたらされると解され、仮説は一応の支持をえたが、しかし仮説②を無限定・無媒介に主張するのは粗すぎ、実践的・教育的に危険が大きいと指摘された。

#### IV. 要約と展望

女子学生に対する“内側からの調査”によってえられた資料から、大学期の主要生活空間領域における適応感および全体的適応感と＜被害・加害体験強度＞＜被害の時期＞＜被害への対処＞＜加害の時期＞＜周囲のいじめへの対応＞＜被害・加害への意味づけ＞との関係を探索しながら、前報や先行研究から導かれた仮説①（被害体験が全体的適応感に対してネガティブな長期的影響を及ぼす）、仮説②（被害体験を契機にした人格発達もありうる）、仮説③（被害体験が交友領域での非適応をもたらす）の検証と、本稿の展開のなかで提出された仮説④（自我同一性と全体的適応感の双方に対して、小学校低学年期の被害・加害がネガティブに、高学年期のそれらがポジティブに機能し、中学期のそれらは関連が弱く、高校期のそれらは再びネガティブに機能する）の検証が行われた。

仮説検証的アプローチの結果をまとめると、まず仮説①③は、被害体験の強度および有無との関係の分析によって支持され、さらに進んで、加害体験も大学期の交友適応感を抑制すること、“被害体験に加害体験が重なることによって大学期の交友適応感と全体的適応感を一層抑制する”との理解がえられた。仮説④も、高校期に加害体験を持つ者が1名のためのために高校期の加害については留保されたものの、基本的に支持され、“小学校高学年期における被害・加害が大学期の適応感に対してポジティブな機能を果たす”という予想外の結果については、この時期のダイナミックな



児童間交友関係のなかに入れるレディネスがあって始めてこの時期の「いじめ」が発生し、その交友レディネスが大学期の適応感にポジティブに機能するという理解が提出された。しかし仮説②に関しては、部分的に支持するデータはえられたものの、基本的には、被害への直面・友人への相談といった＜適切な対処＞がとられ、事後的に成長感がえられた限りにおいて成立するに過ぎぬことが明らかになった。

探索的アプローチではⅡ章以下の章・節の文末小括の如く、多様な知見と解釈が提示されたが、この章で既述した以外の主なものを摘記すると次の通りである。

- a. 被害・加害体験による家族へのしがみつきや準拠から、大学期の良好な家族適応感へ。
- b. 被害・加害体験による交友領域の障害感から、大学期における補償あるいは回復の水路としてのサークル関与と良好なサークル適応感へ。
- c. 被害体験を契機とした友人への相談から、大学期の交友・＜集団活動を媒介とした交流＞領域における良好な適応感へ。消極的・孤独な対処から不良な適応感へ。
- d. 周囲のいじめに対する積極的・援助的構えから大学期の良好な交友・交流適応感へ。観衆としての関わりからそれらの抑制へ。
- e. 高校期の観衆としての関わりから、大学期の広い領域での良好な適応感へ。なおこれについては、大学進学志望者の価値的雰囲気（文化）や学生文化との関連で考察された。
- f. 被害体験に対する外傷的なこだわりの強さから、大学期の不良な交友適応感へ。
- g. 被害・加害体験へのこだわり・被害体験の知性化による防衛から、大学期の良好な学業適応感へ。
- h. 加害体験の“責任転嫁・合理化”から、大学期の良好な交友・交流適応感と全体的適応感へ。

そして全般に、仮説④が提出・支持されたことに如実に示されるように、被害・加害・被害への対処・周囲のいじめへの対応のいずれにおいても、それがどの時期のものであるかによって、例えばある時期の一定の体験・反応はポジティブに機能するのに別の時期の同じ体験や反応はネガティブに機能するというように、大学期の適応に異なる方向の長期的影響を与えることが多い事実と、被害体験の時期が大学期の適応感に影響を及ぼす場合、他の時期での被害の有無とは無関係に不可逆的な影響を及ぼすことが多い事実とが新知見と言えよう。

このようなくいじめの意味の時期に応じた違いを視点とした検討は、小学校高学年に「いじめ」件数がピークを呈する諸統計を“高学年期において「いじめ」と「けんか」の弁別能力が未発達なゆえのバイアス”<sup>6)</sup>と批評した武井（1987, 115-117頁）にも認められるが、従来必ずしも一般的ではないように思われる。本稿では、武井の論脈とは全く別にはあるが、奇しくも同じ＜小学校高学年のいじめ＞異質説が導かれた。かかる視点からの研究が、事実認識のためにも、適応援助実践のためにも一層必要であろう。

最後にこの研究プロジェクト全体の分析枠組(図2)にこれまでの一連の研究を位置づけ、今後の展開方向を述べて結語とする。前報では→の分析考察が、石永(1992)、石永・豊嶋(1992)では-->の分析がなされ、本稿では⇒方向が詳細に論究された。我々の次の課題は「いじめ・

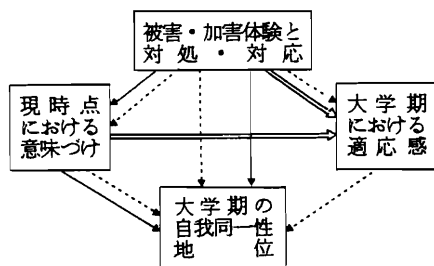


図2. 本研究プロジェクトの分析枠組

いじめられ」現象が大学期の主観的適応感と自我同一性とに及ぼす影響を比較検討することであり、その第一報は近く全国大学保健管理研究会東北地方研究会に報告されよう<sup>7)</sup>。そのうち“内側からのデータ”を増やしながらか、他方ではレポートがないか弱い調査状況での大量データの収集によって、我々がこれまで提出してきた仮説群の検証と再吟味が行われるが、それと並行していじめ問題に対する大学保健管理や学校教育の援助焦点と方略とが検討されることになる。

## 註

- 1) 弘前大学の女子寮には女子寮としては珍しく、旧制高校寮のような“ハード”な行動様式による新入生歓迎行事やコンパの儀礼が継承されており、入寮して間もなくこれらに対する非適応から退寮したり、寮生活不適応を主訴に来談する事例も多い。
- 2) 即自的安定が保たれ、生活空間構造や生活全体を即自的に支える機能を持つこのような場面（あるいは社会・文化）を安倍は「基本的場面（あるいは社会・文化）」と呼んだが、この述語は安倍（1956）には見出し難い。同書に拠る1968～1969年度の特設講義で口述されたものかも知れない。
- 3) 先行研究が見出せないために、加害体験をもつ学生の割合の他調査と比べた多少は不詳。
- 4) 説明変数のノーマティブ・データは、豊嶋・石永ほか（1993, 24-28頁）を参照されたい。
- 5) この3分類が論理的に妥当であるという理由に加え、この3カテゴリー夫々の内部で複数選択した者が多かったという理由から、このような分類を採用したのである（詳しくは豊嶋・石永ほか 1993, 32頁）。
- 6) 武井の批評とは逆に、弁別力の問題を考慮してもなお小学校高学年でピークになることは前報で指摘した（豊嶋・石永ほか 1993, 21頁, 25-26頁）。
- 7) 第32回全国大学保健管理研究会東北地方研究会（1994. 7. 29）において、「大学生における<いじめ・いじめられ体験>・適応・自我同一性の関係構造」とのタイトルで豊嶋によって口演される予定である。

## 文 献

1. 安倍淳吉 1956, 『社会心理学』, 共立出版。
2. 福島 章 1991, 投影法からみた中学生の心理, 福島『イメージ世代の心理を読む』 新曜社, 23-35.  
(初出 1990 臨床精神医学 19(6), 投影法からみた中学生の心理とその変化)。
3. 井上健治・戸田有一・中松雅利 1987, いじめにおける役割, 東京大学教育学部紀要 26, 89-106。
4. 石井完一郎 1981, 現代の若者における意欲減退とシラケをかえりみて, 石井・笠原編『スチューデント・アパシー (現代のエスプリ 168)』 至文堂, 221-231。
5. 石永なお美 1992, 大学生の「いじめ・いじめられ体験」と自我同一性の関係に関する一調査, 平成3年度弘前大学教育学部小学校教員養成課程卒業研究 (未公刊)。
6. 石永なお美・豊嶋秋彦 1992, 大学生の自我同一性地位と過去の「いじめ・いじめられ体験」: 序報, 東北心理学研究 42, 72-73。
7. 加藤雄一 1991, カウンセリングを受けている大学生の, 中学・高校における精神的状態について—いわゆ

- る“良い生徒”の精神的問題－, 総合保健体育科学 (名古屋大学保健体育科学センター) 14(1), 47-51
8. 小嶋賢一 1990, 非行少年に見られる「いじめ」について IV, 日本教育心理学会第32回総会論文集 300.
  9. 森田洋司 1985, 学級集団における「いじめ」の構造, ジュリスト 836, 29-35.
  10. 奥村武久・河原 啓・長井 勇・楠田康子・木村純子・野田恵子・林 光代 1987, 大学生の過去の「いじめ・いじめられ」体験, 第25回全国大学保健管理研究集会報告書 229-233.
  11. 奥村武久・河原 啓・長井 勇・林 光代・鈴木英子・野田恵子・木村純子・楠田康子・植本雅治 1988a, 大学生の過去の「いじめ・いじめられ」体験－第二報－, 神戸大学保健管理センター紀要 1, 5-13.
  12. 奥村武久・川口 侃・河原 啓・長井 勇 1988b, 大学生の過去の「いじめ・いじめられ」体験－神戸商船大学の場合－, 神戸大学保健管理センター紀要 1, 15-22.
  13. 坂西友秀・山本由子 1990, 大学生のいじめられ体験: その2－いじめられ体験をもつ大学生の対人不安について, 第11回大学精神衛生研究会報告書 97-100.
  14. 清水賢二 1986, いじめと子ども病理, 森田・清水『いじめ－教室の病』金子書房, 145-175.
  15. 高橋雅春・高橋依子 1986, 『樹木画テスト』, 文教書院.
  16. 武井槇次 1987, 学校の中のおもしろさ－いじめ, 石田・武井『失われた子ども空間』新曜社, 114-147.
  17. 豊嶋秋彦・石永なお美・遠山宜哉 1993, “いじめ”への対処と大学生期の適応(I)－女子学生における過去の「いじめ・いじめられ体験」と自我同一性－, 弘前大学保健管理概要 15, 19-45.
  18. 豊嶋秋彦・遠山宜哉・芳野晴男 1994, 高校期・大学受験期の生活体制と大学生期の適応(I)－入学直後の適応感および自我同一性との関連性－, 弘前大学保健管理概要 16 (本誌).
  19. 山本由子・坂西友秀 1989, 大学生のいじめられ体験, 第10回大学精神衛生研究会報告書 152-157.
  20. 芳野晴男・豊嶋秋彦・清 俊夫 1989, 大学1年生の生活体制とアイデンティティ, 文化紀要 (弘前大学教養部) 29, 1-17.